

第12回国際社会性昆虫学会 議(パリ)参加と欧州の研究機 関歴訪記 II

小野 正人

ロボットビーの Kirchner 博士と アジアを睨む Koeniger 教授

私たち二人を乗せた電車は 21:30 ビュルツブルグに到着した。1992年の6月に玉川大学に共同研究のために、滞在されたこともある Kirchner 博士が手配してくれた Central Hotel に入り、翌朝ビュルツブルグ大学に向かった。広いキャンパスに個性的な建物群、真に美しい総合大学である。Lindauer 博士が退官されて名誉教授になられ(図11)、ハーバード大学からアリの研究で世界的に名高い Hölldobler 教授が後任の責任者として着任していた。教授とは9年前にミュンヘンで、そして4年前には京都でもお会いして大変親しくして頂き、ピューリッツァー賞に輝いた大著『The Ants』出版後には貴重な一冊をハーバードから送って下さったこともあり、再会を楽しみにしていた。しかしながら、米国アリゾナでの調査旅行が入り留守であったのは残念だった。研究室の主力はほとんどアリに置き変わり、世界中から集められた数十種がひしめく飼育室内のハキリアリやミツボアリの人工巣は見事であった。その一方でミツバチの研究は Kirchner 博士一人にかかっているという感じだった。ロボットのミツバチに収穫ダンスを踊らせて、本物の生きたミツバチを餌場に誘導する実験は特に有名であるが、博士が世に送り出すミツバチの音声コミュニケーションに関する論文は世界の研究者を唸らせている。簡単な打ち合わせの後、Lindauer 博士が昼食に招待してくれ、その後大学の中まで丁寧に案内して下さい。Lindauer 博士は玉川大学に御夫婦で招聘された時のことを昨日のことのよう

され喜んでおられた。また名古屋大学で学位を取られた辻博士が留学中であり楽しい一時もてた。翌朝、Röseler 教授が車でホテルに迎えにきてくれ、ビュルツブルグの古い町並みを案内してくれた(図12)。本当に中世の時代にタイムスリップしたかのような美しい建築物に目を奪われているうちに、ロマンチックホテルについた。そこのレストランで昼食をとりながら、話をうかがうと1968年に奥様と結婚式を挙げる場所を探し歩いたその軌跡を私たちとともにし、今いるこの場所が披露パーティーの会場であったというのである。何ともロマンチックな計らいであった。前回訪問した時には、アシナガバチとマルハナバチの行動生理学的な研究を進められていたが現在は中断されておられる様子であった。午後になって佐々木教授は Kirchner 博士と研究の打ち合わせ、私は新進気鋭の若手研究者の部屋を巡り、ディスカッションを楽しんだ。シジミチョウとアリの共生関係を研究している Fiedler 博士はその進化的背景に関して深く考究されており、ロジックのしっかりした説明に感心させられた。もう一人の若手スタッフ Heinze 博士は、アリ類を広く

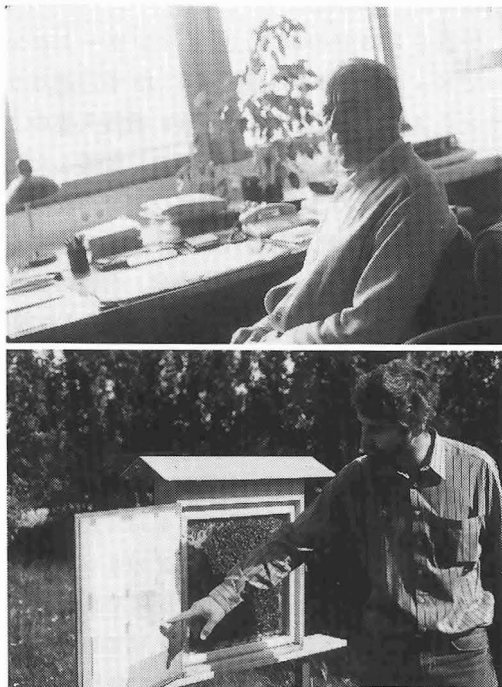


図11 Lindauer 名誉教授(上)と Kirchner 博士

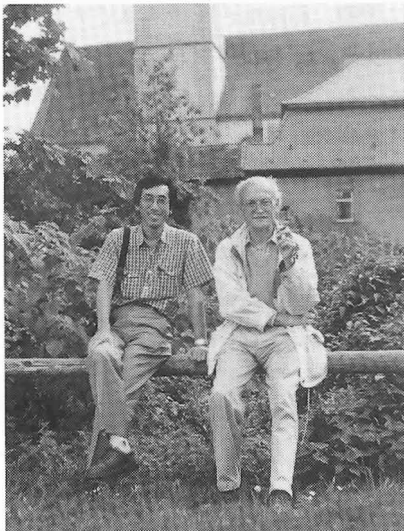


図12 15世紀の町並みを背景に談笑する
Röseler 教授と佐々木教授

分子生物学，化学生態学，行動学といった観点からとらえ，抑えるポイントも鋭く Hölldobler 教授の重点をおく研究分野をぐんぐん押し進めているといった力強い印象を受けた。コンスタンツ大学に教授として移られることに決まっている Kirchner 博士とは，その晩に新天地での活躍を祈って別れた。

翌日9月3日の朝9:30のインターシティーでビュルツブルグを発ち10:43予定通りフランクフルトに到着。Koeniger 教授夫妻のミツバチ研究所があるオバウーゼルに到着した時には11:30になっていた。ミツバチの配偶行動の研究で知られる御婦人が車で迎えに来てくれ，研究所へ到着。教授御夫妻は，令嬢の御結婚を機に住み慣れた家を学生たちの寮として明け渡し，近くのアパートに移り住んでおられた。佐々木教授はアパートの一室に，私はゲストルームに宿をとった。夕方，アパートに学生たちが集まって来てきて，私たちがパリで発表したビデオテープを披露させてもらった。教授御夫妻の研究の目は完全にアジアのミツバチに向けられており，ここ数年間は毎年2か月くらいの調査旅行を実施し，成果を上げている。現在はマレーシアの数十mの樹冠で発見したオオミツバチの雄蜂の集合場所を調査するために，ザイルを使用した木登りを訓練中(図13)

であり，私たちもそれにチャレンジした。翌朝の日曜日は，早朝サイクリングに誘われた。4人に愛犬のベレを加えて出発，途中から見晴らしのよい高台で小休止し，御夫妻は遠くに見える教会を見つめていた。御夫妻のもとに留学していた吉田助教授によれば，それは Koenigers 流の礼拝なのだそうである。ラズベリーの群生地では春に飛び回っていたであろうマルハナバチの受粉作業を頭に浮かべながら豊かに実った自然の恵みに舌鼓を打った。走行距離約10km，なんと羨ましいヨーロッパの休日であった。そのような思いも束の間，研究所に戻るやいなや荷物をまとめて頭は次の訪問国デンマークへ切り換えねばならなかった。御夫妻にフランクフルト国際空港にまで送って頂き，無事その日の18:30コペンハーゲンに着陸した。

ファブリシウスのコレクション， コペンハーゲン大学動物学博物館

Petersen 博士が手配してくれた，Missionshotellet Ansgar に19:40到着。9月5日の翌日タクシーで Petersen 博士を訪ねた。博士のことはミツバチの染色体の研究で知られる干場博士にうかがっていたが，アリバチの分類を専門とする紳士でとても丁寧に対応してくれた。マルハナバチ属とミツバチ属の標本を調査するのが目的であったが，思いも寄らぬ掘り出し物も出てきて驚かされた。また，分類学者として高名な Fabricius のタイプ標本のコレクションはさすがに圧巻であった。現在7種とされている世界のミツバチ属の内3種(トウヨウミツバチ，オオミツバチ，コミツバチ)のタ

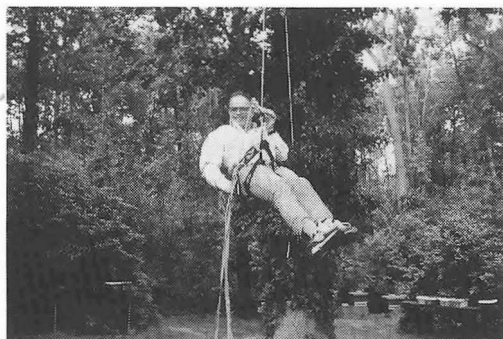


図13 木登りの特訓中の Koeniger 教授

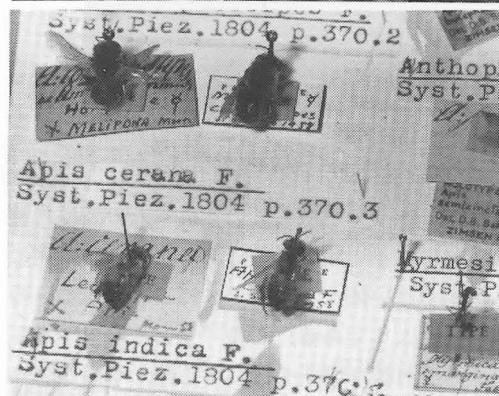
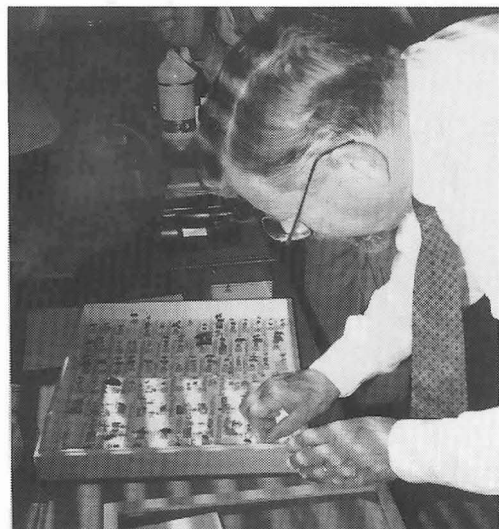


図14 Fabriciusのコレクション(タイプ標本)を整理する Petersen 博士(上)とトウヨウミツバチのタイプ標本

イブ標本(図14)を調査することができた。翌日は、今回の旅程の中で唯一の休日とし、コペンハーゲン市内の散策を楽しんだ。9月7日、最後の訪問国スウェーデンに向けて飛び立った。

ウプサラ大学とリンネの里

私たちを乗せた小型プロペラ機がカルマール空港に到着したのは16:30、プロペラが停止すると空港とは思えないほどの静けさだった。タクシーも何もない。着陸の直前スチュワーデスが、到着後の交通手段が確保できているかどうかを聞いて回った訳が分かった。迎えにきてくれているはずの Tengö 博士の姿はなく、しばらく心細い時が流れた。約20分後、小型の日本車が近くに止まった。「随分早く着いてい

るね、あっ俺の時計がおかしかったのか」と笑いながら博士が出てきた。日本は猛暑の盛りだというのにこちらはもう晩秋、冷えかかった体を車に乗せ一路エランド島に向かった。全長約6km ヨーロッパ最長のエランド橋を渡り約20分、ウプサラ大学生態学研究ステーションに着いた。ゲスト・ルームに入り、お互いの研究内容と将来の共同研究の可能性について話し合った。Tengö 博士の研究対象はマルハナバチの化学生態学であり、私のテーマとも深く関連している。日本産のマルハナバチで現在まで得られている配偶行動を制御するフェロモンや巢内の血縁構造を明らかにするための分子生物学的なアプローチには大変興味を示され、今後も連絡を取り合いながら仕事を進めることを希望された。エランド島は、南側の約半分がライムストーンの花崗岩で覆われており、極めてユニークな植生をもっている。バイキング時代の村落遺跡エーケトルプの見学も含めて、島の南側を案内してくれた(図15)。360度見渡す限りの地平線は地球の丸さを感じさせ、所々に咲く高山植物のような可憐な花々とそれに訪花するマルハナバチの姿に魅了された。夜は、博士の自宅に招かれ、奥様が腕を振ったデンニッシュ料理に感謝した。翌朝9:00の飛行機でカルマールからストックホルムへ飛んだ。SAS Strand Hotel にチェックインして荷物を置き、列車でウプサラに向かった。過去11人のノーベル賞受賞者を輩出した北欧最古のウプサラ大学のメインキャンパスはさすがに格調高く、学生時代に分子生物学の講義の合間にその大学を絶賛する故草薙昭雄教授の姿が目に浮かんだ。ウプサ



図15 Tengö 博士とエランド島を散策

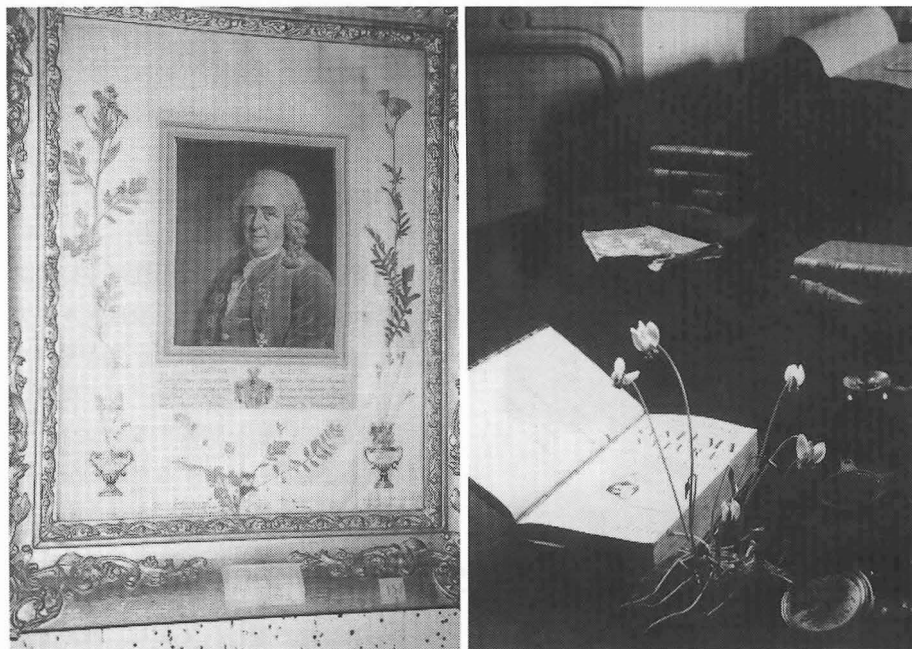


図 16 Linné's Hammarby に展示されているリンネの肖像画と
1758年の著書 *Systema Naturae* (セイヨウミツバチの原記載がある)

ラといえば忘れてならないのは、分類学の祖 Carl von Linné である。1758年に著書 *Systema Naturae* にセイヨウミツバチを記載した研究者でもあるので関係者は忘れることができない。ウプサラ市内よりタクシーで約20分程のところにある Linné's Hammarby に彼にまつわる思いでの品々が展示されているという情報を得て、閉館5分前にそこに駆けつけ貴重な展示品の数々を見ることができた(図16)。ウプサラ市内からの地の利が悪いせいか館内には、私たちの2人しかいなかった。閉館間際に駆け込んで来て、Linné が植物採集に使用した道具、美しい植物の形態図、椅子や机などの調

度品にしきりに感激している日本人の姿は管理人の目には不思議な光景であつたらう。植物にも造詣の深い佐々木教授は、特に感じ入るものがあつたようである。この“リンネの里”ともいえる忘れ難き場所を後にする時、小雨が降り始めていた。

9月10日、長かつたようで短かつた欧州の旅にも幕が下りる時がきた。今回の歴訪の旅を回顧した帰路の飛行機の中で、社会性昆虫という興味深い研究対象を通じて結ばれている研究の輪をこれからも世界に向けてより大きく太くしていかなければならないと思った。

(〒194 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学)